

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	三島由紀夫『沈める滝』論：占領終了後の日本と、アメリカ
Author(s)	九内, 悠水子
Citation	近代文学試論, 60 : 37 - 47
Issue Date	2022-12-25
DOI	
Self DOI	<a href="https://doi.org/10.15027/54880">10.15027/54880</a>
URL	<a href="https://doi.org/10.15027/54880">https://doi.org/10.15027/54880</a>
Right	
Relation	



## 三島由紀夫『沈める滝』論

— 占領終了後の日本と、アメリカ —

九 内 悠水子

### 1. はじめに

1955（昭和30）年1月～4月にかけて雑誌『群像』で連載された三島由紀夫の『沈める滝』は、同時代的評価としては毀誉相半ば<sup>(1)</sup>であったとされている。一方、先行研究においては、野口武彦や栗栖眞人のように「真夏の死」、『鏡子の家』、「博覧会」、『潮騒』といった他作品との関連の中で三島文学における位置づけを図るものや、宮園美佳の指摘するような主人公昇と登場人物との関係性の中で主題を読み解いていこうとするもの<sup>(3)</sup>がこれまでに提示されている。中でも、栗栖は、村松剛が文庫版解説で指摘した「作品発表時点における社会動向との関わり」<sup>(4)</sup>は重要で、綿密な考察が必要であるとの指摘を行っている。確かに『沈める滝』は、占領が終了した時代を舞台とした物語となっており、このことは作品解釈に大きな意味を持つように思われる。

ところで、『沈める滝』はある種のダム小説である。三島によれば、ルポルターージュを書いたつもりはなく、あくまでダムは「主題を展開するために、最も適当な素材」<sup>(5)</sup>であったようだが、ダムをモチーフに彼が描いたのは、占領が終了した時代の日本、そしてその後の日本が

たどるべき運命の暗示であったというのが、稿者の見解である。本稿では、まず、昇の言説や同時代的背景からダム、ないしダム建設によって表象される大國アメリカの様相についてみていく。次いで、明治の実業家たる九造から、占領後の日本を生きる青年技術者昇へと至る男性性のありよう、また滝に見立てられた頭子や、リュシヨールの女主人加奈子らが体現する女性性のありようがどのようなものであったかを考察し、最終的に、三島がこの時代に見、何を描こうとしていたのかについて言及していくことにする。併せて、三島文学の中での本作品の位置、ならびに管見の範囲ではあるが、これまで指摘されてこなかった九造のモデルについても私見を述べたい。

### 2. 『沈める滝』の背景

本論に入る前に『沈める滝』の背景について少し整理しておく。まず、ダム小説というジャンルにおける『沈める滝』の位置付けであるが、独立行政法人水資源機構に勤め、30年にわたり水・河川・湖沼関係の文献を収集してきた古賀邦雄によれば、「ダム建設に挑む人たちと、家族を含めてその人間像を描き出す」、いわば「ダム文学」<sup>(6)</sup>なる

ものが存在するという。ダム建設をめぐる生じる「利害関係の衝突」や「作られる側と作る側の確執や葛藤」「悶着」、ダム建設地点の行政の「苦渋」などは、社会的にも反響を呼ぶため、石川達三や城山三郎、三島由紀夫など多くの作家が、ダム建設にかかわる人間葛藤をこれまでに描いてきた。

古賀は、ダム文学は、おおよそ5つのタイプに大別できるとし、三島の『沈める滝』はその中でも「技術者と女性の愛」を描いたもので、「非道徳的な愛を怜悯な流麗な文章で綴った本作における「ダム現場の視点は確かなもの」と評している。なお、三島の『沈める滝』に先立つダム小説として古賀は、1929（昭和4）年発表の井伏鱒二の小説『朽助のゐる谷間』、1937（昭和12）年発表の石川達三の小説『日陰の村』を挙げているが、井伏や石川の小説は、ダムに沈む村民の苦悩がメインとなって描かれているため、ダム建設そのものを本格的に取り上げた最初の作品は『沈める滝』ということになる。

そもそも、日本におけるダムの歴史そのものがまだ浅く、『沈める滝』のモデルとなった奥只見のようないわゆる多目的ダムは、昭和に入ってから建設が始まっている。先述したように三島は、『沈める滝』におけるダムは「たまたま主題を展開するために、最も適当な素材」だったとしているが、いち早くこの素材に目を付けた先見の明は評価されてしかるべきだろう。なによりダムというモチーフを通じて占領後の日本、そしてその背後にあるアメリカの影響を描いていったという点に、その慧眼さを感じる事ができる。また、いわゆるダム屋とよばれる長年ダム建設に携わってきた技術者たちが、現場のリアルさや、

技術者の本質、ダム建設という事業そのものをよく捉えていると評価していることもまた、注目に値しよう。

次に、主人公の祖父城所九造のモデルについて触れておく。登場人物のモデルとしてはヒロイン頭子に、三島が当時交際していたとされる、赤坂の料亭の娘豊田貞子の影響が見られることがすでに複数の論者によって指摘されている。しかし九造のモデルと思われる松永安左エ門については管見の範囲ではあるが、まだ指摘されていない。

主人公昇の祖父で幼少期の人格形成に影響を与えた九造は、「電力界では誰知らぬ者がなく、豪宕で、復讐心に富み、道楽には目がなく、おそるべき精力の持主で、終始一貫、「民衆の敵」であるような人物として描かれている。ところで『沈める滝』の創作ノートには、松永安左エ門の名が見られるが、彼は、1875（明治8）年に長崎県壱岐の商家に生まれた明治の実業家である。安左エ門の祖父は身一つで商売をおこし手広く事業を伸ばした人物で、3代目である彼も当然跡取りとして期待されていた。しかし福沢諭吉の『学問ノススメ』に大いに影響を受け、家族の反対を押し切って15歳にして単身東京へ向かい、慶応に入る。慶応では諭吉ならびに彼の婿養子桃介の知遇を得、様々な影響を受けるも、途中で学問への意欲を失ったことから実業界へ足を踏み入れることになった。やがて諭吉が1898（明治31）年に『時事新報』に書いた、日本には水力電気を起こす絶好の条件があるため、この分野に進出すべきという論文に影響を受け、桃介とともに、明治末ごろより電力事業に携わり、めきめきと頭角を現すに至る。戦争末期から戦後しばらくの10年余りは隠遁生活を送ったものの、戦後は再び、電気事業の再編成を主導、ときにその剛腕な手法に

批判が向けられるも、戦後の日本の産業復興に大きな影響を与え続けた。

作中では、九造に関して、「戦争中の電力統制に最後まで屈しなかった」といった描写が見られる。先述したように、戦争末期から10年あまりの間、安左エ門が隠遁生活を送る羽目になったのは、日中戦争の本格化という流れの中で行われようとしていた電力国営化に公然とこみつけたからであった。このことは先に挙げた『沈める滝』創作ノートにも記載されている。九造は「役人はつねに愚鈍であり、民衆は常に盲目」だとみなしていたが、安左エ門も、大の役人嫌いで、「官吏は人間のクズ」というのが持論であったという。また、安左エ門が戦後、電力再編に当たって、一般消費者の電気代値上げを強行したことで、「電力の鬼」と国民から反感を買い、民衆からの搾取だと糾弾され国会喚問を受けたという点も、「終始一貫、「民衆の敵」であったという九造の描写と類似する。

昇の眼に九造は、「尽きざる精力と、絶え間のない情熱の持続」をもった多忙な実業家として映っていたが、松永安左エ門も、時に強引なまでに信念を貫き「わが人生は闘争なり」と生涯をかけて電力事業に邁進した。九造のモデルとして安左エ門が三島の頭にあつたことはまず間違いないだろう。ただし、祖父にあつて自分にはないものを「精力」や、「情熱」の持続だと自覚していた昇のことを考えると、安左エ門をベースとして、岩崎弥太郎や安田善次郎、福沢桃介、渋沢栄一といった、明治期の実業家・起業家たちの、野心、志、突破力といった諸々の要素が凝縮されたのが、九造と言えるのではあるまいか。

### 3. 国土開発としてのダム建設とアメリカ

次に、以上の背景を踏まえ、昇の言説や同時代的背景から、ダムないしダム建設によって表象される大國アメリカの思惑を見ていく。先述したように、『沈める滝』は、戦争が終了した時代の日本、そしてその後の日本がたどるべき運命の暗示であったというのが、稿者の見解である。そもそもともよくそれを体現しているのが、作中におけるダムないし、ダム建設であった。

町村敬志の著書『開発主義の構造と心性』<sup>13)</sup>は、戦後の日本が、なぜかくも開発へと深く依存する社会になったのかを、1956（昭和31）年に完成した戦後初の巨大プロジェクト、佐久間ダムの建設をベースに解き明かしていく労作である。町村はこの著書において、戦前日本の「資源の乏しい国」という認識こそ東アジア征服とアメリカに対する攻撃という無謀な企てを生んだと考えたGHQ天然資源部技術顧問アッカーマンが、日本の自然資源調査に関する記者会見において、あえて「資源の乏しくない国・日本」というイメージを流布したことを指摘する。アッカーマン、ひいては合衆国政府の思惑は、日本に「持てる国」としての自己認識を植え付けること、そしてそれによって再び海外侵略の野望を持たせず、経済的に自立させていく道を選ばせること、というものであった。アメリカによって流布された「資源の乏しくない国・日本」というイメージは、敗戦後の国民に勇気を与え、これによってその後の日本の開発路線が決定づけられた。ここに占領政策の巧みさやうかがうことができよう。アメリカにとって望ましい方向へと進むレールに乗せられた日本は、占領終了後もアメリカの影響

響を受け、そしてアメリカに依存し続けながら国土の徹底的な「開発」を推し進めることとなるが、そのさいたる例が戦後のダム建設ラッシュであった。

アメリカの影響力は、日本の「開発」戦略のみならず、具体的なダム建設工事においても強く現れている。『沈める滝』は、昇らの会社の社長が、アメリカへ赴き、銀行からの融資を取り付ける代わりに、協力会社としてアメリカの土建会社を受け入れ、そこを介してアメリカ製大型重機を買い入れるという描写がなされているが、実際に、アメリカからの融資と、大型重機の購入なしには、戦後日本のダム建設は成しえなかつた。また、木曾川の丸川ダム建設に当たっては日本製大型重機を用いた工事が行われたものの、操作技術の未熟さなどから故障が続出し工事が捗らず、結局はアメリカの技術や大型重機に頼らざるを得なかつたという事例<sup>14</sup>もあつた。佐久間ダムが建設された佐久間村の元村長はのちに「私はあの巨大な機械力をはじめ見た時、対米戦争の敗北を実感として味わつた。」と述懐した<sup>15</sup>というが、占領が終了しても依然として続くアメリカの強い影響力、アメリカへの依存なしに自立の道を歩めない日本、そういったものが、ダム建設には常に付きまかつたのである。そしてこのことは作中でも意図的に表象されていると言えるだろう。

ちなみに『沈める滝』創作ノート<sup>16</sup>には、「ダムの社会関係」について、「ダムが資本家の不当利益のために利用され、労働者は搾取され、日本は多くを外資に仰いでいる売国的行為であり、ダム建設はアメリカの軍事的」という記載が見られる。また、『沈める滝』と同じくダム建設をめぐる三島の短編作品「山の魂」の冒頭には、アメリカ外資

によるダム建設、アメリカ資本による日本支配がごくわずかだが描かれている。さらには田中美代子も「山の魂」についての解説の中で、ダム建設の下に押しつぶされる日本の自然と生活、利権稼ぎといった構図は、グロテスクな日本の近代の象徴であるとの指摘を行っているように、三島が、ダム建設をめぐるアメリカの思惑やそれに翻弄される日本の姿を冷静に捉え、作中に描き込んでいることは明白である。

ところでこのような、国土開発、またその一例としてのダムの建設が、日本にもたらした影響について、町村は先の著書で、ダム建設をはじめとする戦後の国土「開発」は、「人間の生活する領域」をいかに拡大させ、その内容を充実させていくかにあり、ナショナル、リージョンナル、ローカルの連環の中で進められていくべきものであつたにもかかわらず、結果的に「地方」は「中央」繁栄のための犠牲となつた、また開拓し得られたものは、「中央」へと供給され、犠牲となつた「地方」では、それまでの生業システムや生活様式、伝統的生活倫理、長い年月をかけて形成されてきた景観が失われていったと述べている。『沈める滝』にもわずかに描かれているが、ダム建設予定地には、人々が住んでおり、この人々は、江戸期・安政年間に銀山採掘が終了した地に、明治末期になって入植した開拓者たち<sup>17</sup>であつた。決して豊かな地とは言えなかつたようだが、彼らは厳しい環境の中で一から田畑を開いていった。しかしそのようにして苦労して開拓した地はすべてダム湖の底に沈むこととなる。「地方」に根付き暮らしていた人々の生活の犠牲の上にダム建設は成り立っていたのである。

三島は、風光明媚で純潔な自然にコンクリートと鉄の異物を押し込むダム工事を、人口の核を無理やり埋め込まれた真珠貝の苦痛になぞ

らえている<sup>18)</sup>。アメリカの戦略に乗り、アメリカに依存しながら開発と成長を推し進めていった占領後の日本は、苦痛に麻痺したかのように、自然や、それまで築いてきた風土や文化や歴史を犠牲にしなから、経済的發展をひたすらに追い求めている<sup>19)</sup>。『沈める滝』では、占領終了後の日本の姿のみならず、その後の日本の行く末までも示唆していると言えよう。

#### 4. 『沈める滝』に見られる女性性

ここまでは、ダムが表象する占領後の日本と、その背後にあるアメリカの様相などを観てきたが、次に、作中人物らが体現する「性」の在り様から、三島がこの時代をどのように描いているのかを考えてみたい。まずは、『沈める滝』における女性性がどのように描かれているのかを、ヒロイン頸子を中心にみていく。

作中では頸子が、昇によって滝に見たてられており、タイトルにも用いられている。頸子に見たてられたそれは、やがて沈む地域にあつた名もなき小さな滝であつたが、季節によって様々に姿を変え、その変化は頸子の不感からの目覚めともリンクしていることがこれまでも指摘されている。しかしなぜ昇は、頸子を滝に見たてたのだろうか？ 例えば寺田透は、「石と鉄で育てられた、無機質な心の男なら、かりにも滝に女を見るといふやうなことはあるべくもなく、むしろそこに自分のうちの虚無の力学をみたものではなからうか」、「ひた目に見る滝は、見るものを内観にさそひこむものなのである」との指摘<sup>20)</sup>を行っている。ブライアン・J・ハドソンの『凶説 滝と人間の歴史』<sup>21)</sup>は、滝のメ

カニズムや歴史、芸術や文化への影響を様々な地球科学と文化史が融合した見地から解き明かしていく大作であるが、ブライアンは、本書の中で、滝は美と崇高という性質を有すこと、また滝の描写には「身もだえし」、「体をよじり」ながら、「情熱」の渦へと突き進むといった性的イメージがあふれており、さまざまな芸術によってそのイメージが用いられてきたことを指摘する。とすれば、昇が、無意識にせよ滝の中に、頸子の身体の奥底に眠る性の情熱を見出していたという解釈もまた成り立つのではなからうか。

ところで、作中における頸子の描写を拾ってみると、出勤する夫には寝たままで応対、ときにそれさえもしないといった具合で、いわゆる妻業的なことを拒否していることが分かる。夫は彼女に期待もせず、男ができては咎めもせず、とにかく家に帰ってくればいいといったスタンスで、彼女は「生活全部が自分の意志で動いてゐる」状態であつた。よつて既婚者にもかかわらず、これまで欲望や本能に任せた自由な性愛を貫いてきたのである。不感症のため性の喜びは知らないが、少なくとも同時代的な性モラルやジェンダー観、道徳規範にはそこまです縛られてはいない。また、これまでに昇のワンナイトラブの相手を務めてきた女性たちも頸子同様、同時代的な性モラルやジェンダー観、道徳規範には囚われていないと言える。たとえば服飾店で昇が見初めた婦人は、彼を自宅に招き入れ関係に及んでおり、結婚前と思しき娘たちも、時にはその日のうちに性的関係を結ぶという奔放さを見せている。

『沈める滝』は、越冬食料をくすねたお金で瀬山がキャンノンIIDを買ったという記述<sup>22)</sup>などから、執筆年とほぼ同時期を舞台とする作品と

思われるが、果たしてこの時期の女性の「性」をめぐる在り様はどのような状況だったのであろうか？

久布白落実は、日本キリスト教婦人矯風会をベースに戦前から戦後にわたって女性の「純潔」教育に取り組み、教育を「純潔日本の基礎工事」と捉え、「幼年期から40歳前後までを6段階に分け、発達段階に合わせた性教育論を展開」し、戦前・戦後にわたって女性解放運動をリードしていったが、こと敗戦直後の日本では、性に関する課題が社会問題化し人々を不安と苦悩に陥れていたため、占領軍と政府がイニシアチブをとり、GHQ主導のもと1949（昭和24）年に文部省から「純潔教育基本要項」が出された。<sup>21</sup>「純潔教育」の目標としては、「社会の純化を計り男女間の道徳を確立、正しい性科学知識を普及し性道徳を高揚し健全な心身の発達と明朗な環境をつくること、文化を通して情操の陶冶、趣味の洗練をはかること」などが挙げられ、また「純潔」の定義としては、「性的健康であることを条件として、結婚前には性的交渉のないこと、結婚後は夫婦間以外に性的交渉のないこと」が規定された。<sup>22</sup>

このように政治・教育の側からは規制が推し進められたことが分かるが、一方で、庶民・大衆の側はどうだったのだろうか。1950年代に刊行された性風俗雑誌を収集しているジャパンデジタルアーカイブスセンターの「社会文化史データベース」で調査してみると、「純潔」を重んじない未婚の若い女性たち、あるいは既婚者でありながら「姦通」にいそしむ女性たちが一定数いたことがわかる。また、このデータベースで「姦通」と検索すると、「妻が姦通したときの見破り方」、「こういう女性が姦通する」、「姦通夫人の実態追跡記」、「科学的姦通

発見術」、「姦通発見 好色女房の姦通発見の秘法」といった、夫が「姦通」する妻を見破る方法を指南した記事が次々とヒットする。GHQの五大改革指令のうちトップに挙げたのは「婦人解放」であったが、占領下の日本における「婦人解放」政策はRAA、すなわち占領軍慰安所を設ける一方で、売春防止法を成立させ公娼を廃止、また純潔教育を推し進めるというような、矛盾に満ちたものだった。<sup>23</sup>

純潔教育を進める一方で、そこから逃れ自由であるとする女性が現に数多くいたことは今見てきたとおりだが、『沈める滝』における女性たちもその例にあずかっているとさえそうである。占領下、占領後の日本、ひいてはアメリカの建前と本音、矛盾の中をしなやかにすり抜け、人間としての「欲望」に忠実であらんとする女性たちの姿がこの作品では描かれているが、結局のところ頭子は愛に破れ、自死という結末を選ぶ。一見、連れ戻しに來た頭子の夫菊池、姦通が露見しあっさりと事態を夫に委ねた昇、暴露に暴露を重ね事態をこじらせてしまう瀬山ら、「男」の論理に屈したようにも思われるが、一方でそうだった「男」の論理から自由になるために、自ら死を選んだ、自分の欲望に忠実に生きたと、見ることもできよう。

##### 5. 『沈める滝』に見られる男性性

続いて、『沈める滝』に見られる男性性についてみていきたい。昇は、生後間もなく母を失い、自分に関心を寄せなかった父をも10歳で亡くした後、祖父九造の厚い庇護のもとで育つが、祖父は「母」に代わる存在を昇の傍におこうとはしなかった。一方で、実業ではなく芸術

に興味を示した息子に対する反省もあつてか、発電機の模型や、鉄の組立玩具、河底の石など、要するに「石と鉄」ばかりを幼少期の昇に与えてきた。昇は、父がぞつとするほどに情操の欠けた子供であり、やがては心を閉ざした孤独な青年へと成長していく。

特殊な環境で成長した昇は、はた目からは何不自由な青年として見られながらも、その内面は荒涼としており、根強い孤独感・人間不信を抱いていた。ワナイトラブを繰り返す昇が、相手と永続的な関係を結ぶことを異様なまでに怖れるのは、「捨てたり、捨てられたり」といふ残酷な人間関係」を回避するための種の防御策であつたように思われる。彼は、祖父のところまで書生をし、少年時代から自分を知る瀬山は別として、会社の同僚とは社外での付き合いを全くせず、ワナイトラブの相手にも偽名や偽の職業を教えるほどの徹底ぶりであつた。また、自分の内面を誰かに知られることを注意深く避けてもいた。彼のことを「幸せな王子」と見てくれる加奈子や、無鉄砲にも越冬を志願する昇を「単純」な青年として見る技師長の前では、安心して「一人ぼっち」でいられるものの、それ以外の相手に対しては、先述したような堅固なバリアを張り、決して自分のテリトリーには入れさせない。昇が「自分の感情をいつはらう」とはしない「硝子張りの性格」を持つ瀬山、自分の恥部をも平気で他人にさらすような、「感情をもたず、決して屈辱を怖れない」頭子の夫菊池を、ある意味すごいと認める様子などからもそれは窺えるだろう。

地理学者のジェイ・アプルトンは、動物行動学者コンラート・ローレンツの「自らの姿を隠しつつ、周囲を見渡せる環境は生存していくために有利なポジショニングでありポジティブなものであつた」とい

う指摘を手掛かりに、眺望を得たいという欲望と、安全のための隠れ家を得たいという2つの欲望が同時にかなえられるとき、そこに美的満足が生じることを発見、これを「隠れ場」<sup>29)</sup>理論と名付けた。アプルトンの「隠れ場」<sup>29)</sup>理論は、建築学や歴史学、美術、文学といった様々な領域で応用されているが、『沈める滝』における昇の言動はまさにこの理論に当てはまると言えよう。彼の場合、まずは自分を安全地帯においてからでないと、周囲との関係をうまく築くことができない。正体を明かさず一晩のみの付き合いをする、見てほしいように自分を見てくれる人に安心感を覚える、といった具合である。昇は無感動でドライな人間だとみなされがちだが、非常に傷つきやすく繊細な心を持つが故に、過剰なまでに自衛し、その結果、より深い孤独に陥ってしまうという負のスパイラルのなかでもがいているのである。

ところで、このような昇の孤独感、人間不信などは、祖父によって、「母」あるいは「母」に代わる存在を排除され育つたことに起因すると考えられる。田中澄江は、「自己放棄といい、非人間化への努力といい、愛情を否定する主人公の行爲のすべてが、最大の謙虚さで示された愛の渴望に思われた」との指摘<sup>30)</sup>を行っているが、孤独の源泉、「愛」の渴望の対象は、彼に欠落していた、無償の愛を注いでくれる「母」であり、「家族」であつたのではなからうか。越冬に際し、昇が祖父形見のお古のトランクと、家族の古いアルバム、なかならず母の写真を持参していたことがそれを裏付けている。

また、昇は、祖父が残した財産により、「二十七歳がもてるだけの若さや金、秀抜な頭脳、強靱な体軀、完全自由、人ぎきのわるくない

職業等を持った、はた目からは「幸福な王子」に見える青年であった。しかし、「まだ持たないものを思ひ描くことは人を酔はせるが、現に持つてゐるものはわれわれを酔はせない。もし酔ふとしても、それは人工的な酔ひである」とあるように、すべてを持つてゐるがゆえに、「情熱」や「精力」、「欲望」を著しく欠いてもいた。三島は、昇の祖父九造が生きていたような明治時代は、立身出世主義のように一つの公認された社会的欲望が、大多数の人たちを動かしていたけれども、現代の日本は、社会が一種の袋小路に入つてしまつていて、未来の希望もあまり見られないと述べている。<sup>31</sup>簡単に欲望が満足させられてしまう悲しさ、空虚感に拍車がかかつているのが今の世だと三島は言うのである。すべてが与えられてしまつてゐる上、九造たちが生きていた明治時代にあつたような共通の「社会的欲望」も消えた現代では、「情熱」や「精力」、「欲望」を自分の中には見出すことは困難で、昇は、時に焦りを感じたりもしている。

占領下の矛盾に満ちた「性政策」の中をしなやかにすり抜け、人間としての欲望に忠実にたくましく生きていく『沈める滝』の女性たちには比して、過剰なまでの自己防衛本能からワンナイトラブを繰り返すしか術のない昇や、社会人になつた今でも母を愛してやまないと言言する田代、あるいは性的欲望を果たすと宣言しつつも結局のところ女に人女にしか手を出せない佐藤など、女性たちと比べ『沈める滝』における戦後の青年たちは、強烈な「欲望」や「情熱」、「精力」といったものを持ち合わせていない。祖父九造が体現していたような「男性性」は、昇らにはそこまで備わつておらず、代わりに彼らは与えられた「仕事」、すなわち「ダム建設」という壮大なプロジェクトに自分の存在意

義や欲望、情熱を求めている。しかしそれは先に見てきたように、アメリカによつて巧妙に誘導された、アメリカにとつて都合の良いお仕着せの、刷り込まれた欲望や情熱でしかなかったのである。

## 6. おわりに

ここまで、『沈める滝』においては、占領後もなおアメリカの影響を受け、その依存のもとにある日本の姿が描かれていることを見てきた。本作は占領終了の約3年後に書かれ、また作品内時間もほぼ同時期に設定されているが、三島は占領中からすでに、アメリカがもたらした戦後民主主義という名の偽善と詐術を危惧していた。偽善と詐術に満ちた巧妙な占領戦略にまんまとはまり、占領終了後もなおその影響から逃れられない、あるいはその呪縛に陥つたことにはさえずっていない日本、三島は非常に早い段階でこのような状況を危惧し、またそれを作品の中で描いてきたのである。

2021（令和3）年に見つかった1949（昭和24）年の三島の掌編「恋文」では、作中にPXが登場するが、斎藤理生はこれを、日本でありながら日本ではない占領下の状況を意図して用いられていると解釈する。<sup>32</sup>『沈める滝』では昇が偽った職業の一つがPXのブローカーであったが、偽りとは言え、占領軍の手先のような仕事を昇が選ぶ取つてゐることに三島の意図を感じる。

三島とアメリカをめぐる問題は近年、南相旭をはじめ、様々な研究者によつて着目され、作品や言説からその内実が検討されつつある。<sup>33</sup>南は、占領後の日本を本格的に問題化している先駆的な作品として、

1959(昭和34)年の『鏡子の家』を挙げているが、それより前、すなわち1955(昭和30)年の『沈める滝』においてすでに三島は、この問題を問うているのである。

注

- (1) 栗栖真人「沈める滝」(松本徹・佐藤秀明・井上隆史編『三島由紀夫事典』〔2000・11 勉誠出版〕)。
- (2) 野口武彦『三島由紀夫の世界』(1968・12 講談社)、栗栖真人「三島由紀夫『沈める滝』考」(『語文90』1994・12)。野口は「真夏の死」や『鏡子の家』との関連性を、栗栖は「博覧会」や『潮騒』との関連性を、それぞれ指摘している。
- (3) 宮菌美佳「三島由紀夫『沈める滝』論―昇の生育環境に着目して―」(『日本文芸研究52(1)』2000・6)。宮菌は『沈める滝』は、「昇が、生の意味としての時を確固としたものとして獲得」し、それにより「祖父への確かな通路」をも獲得した作品であると述べている。
- (4) 村松剛「解説」(『沈める滝』1963・12 新潮文庫)。
- (5) 三島由紀夫『沈める滝』について(『中央公論』1954・12)。
- (6) 古賀邦雄「ダム」の書誌あれこれ(5)小説を読む(上)、『月間ダム日本713』2004・3)。
- (7) 古賀は、ダム文学を、1「ダム水没者の苦悩」、2「建設への対峙」、3「建設の社会的批判」、4「ダム技術者の人間性」、5「技術者と女性との愛」に大別できるとし、三島の『沈める滝』は5に該当すると述べているが、稿者は『沈める滝』は残りの4つの要素も含む重層的なダム小説と考える。
- (8) 古賀邦雄「ダム」の書誌あれこれ(6)小説を読む(下)、『月間ダム日本714』2004・4)。
- (9) 原稔明「随想 三島由紀夫とダム」(『ダム技術371』2017・8)、館真人「ダム造りのプロが読む、三島由紀夫『沈める滝』」(一般社団法人日本ダム協会ダム便覧HP 2004・9)。原は、「若干30歳の文学青年が、ダム建設の技術とダム技術者の本質を(中略)見事に表現していることに恐れ入る」、館は「ストーリーよりも断片的に描写される奥深い自然の様子や、ダム技術者の創造に対する取り組みの様子が印象深く」、またダムの背景となる駒ヶ岳の超絶的自然に対する昇の心情描写に対し、「作者の巧みな表現を差し引いても、これに近い感動をダム技術者なら誰しも知っているのではないだろうか」との感想をそれぞれ述べている。
- (10) 村松剛『三島由紀夫の世界』(1990・9 新潮社)、岩下尚志『ヒタメン 三島由紀夫が女と逢う時…』(2011・12 雄山閣)、岡山典弘『三島由紀夫が愛した美女たち』(2016・11 啓文社書房)。
- (11) 三島由紀夫『沈める滝』創作ノート(『決定版 三島由紀夫全集5』2001・4 新潮社)。
- (12) 松永安左エ門(国史大辞典編集委員会編『国史大事典13』1992・1 吉川弘文館)、橘川武郎『松永安左エ門』(2004・11 ミネルヴァ書房)、新井恵美子『七十歳からの挑戦―電力の鬼松永安左エ門―』(2011・8 プレイン)、松永英二郎「電力の鬼 その破天荒な生き様 孫が語る松永安左エ門の生涯(1〜8)」(『月刊times44(7)〜45(9)』2020・8〜2021・11)。

- (13) 町村敬志『開発主義の構造と心性―戦後日本がダムでみた夢と現実―』(2011・12 御茶の水書房)。
- (14) 仁昌寺正一「復興期における只見川電源帰属問題と東北開発―下―」(『東北学院大学論集 経済学128』1995・03)、川村一彦「戦後日本の回想S・31」(2020・8 歴史研究会)。
- (15) 注13に同じ。
- (16) 田中美代子「解説」(『鍵のかかる部屋』1979・12 新潮文庫)。
- (17) 新潟県魚沼地域振興局編「佐梨川・只見川 川ガイド」(2009・3 新潟県魚沼地域振興局地域整備部)。本ガイドには「明治時代になると、銀山での採掘はほとんど行なわれなくなり、再び山に静寂が戻りました。そして、開拓の時代が始まります。豪雪地帯で平坦地も少ない魚沼地方では農地が不足していて、農家の二、三男対策に苦慮していました。そこで、只見川や北ノ又川沿いに伸びる細長い平坦地を開墾し、ここにユートピアをつくろうという人々が現われました。本格的に開拓が始まったのは明治43年からで、主導となったのは銀山拓殖株式会社です。入植者を募集し、開墾した開墾した土地の四分の一は入植者に無償で譲渡し、残りの土地からあがる収穫のうちの何割かを会社が取得する、ということが原則でした」との記載がある。
- (18) 注5に同じ。
- (19) 『沈める滝』作中には、「ダム建設は(中略)、一種の象徴的な事業だと思われた。われわれが山や川の、自然のなほ未開拓な効用をうけとる。今日ではまだ幸ひに、われわれ自身の人間的能力である情熱や精力の発揮の代償としてうけとるのだ。そして自然の効用が発掘
- しつくされ、地球が滓まで利用されて荒廢の極に達するまでは、人間の情熱や精力は根絶やしにはされまいといふ確信が昇にはあつた」との描写が見られる。
- (20) 寺田透「三島由紀夫『沈める滝』解説」(『寺田透・評論V 1956―1960 生への意志』1972・5 思潮社)。
- (21) ブライアン・J・ハドソン著・鎌田浩毅監修・田口未和訳『図説 滝と人間の歴史』(2013・12 原書房)。
- (22) キヤノンカメラミュージアム (<https://global.canon/ja/en/museum/product/finml7.html>) 2022年8月24日閲覧)によると、キヤノンII Dの発売は1952(昭和27)年10月となっている。
- (23) 嶺山敦子「戦後における久布白落実の性教育論―性の問題解決をめぐる―」(『人間福祉学研究4(1)』2011・10)。
- (24) 柳園順子「戦後教育改革期の保健教育における包摂と排除―「成熟期への到達」に着目して―」(『鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要26』2022・3)。
- (25) 山本信弘・道乃里江・戸田百合子・小山健蔵・須藤勝見／大阪教育大学養護教室「性教育の歴史の変遷の文献的一考察」(『大阪教育大学紀要第V部門39(2)』1991・2)。
- (26) 成瀬亮「純潔よ さらば」(『千一夜6(11)』1953・11)では、「女子学生の経験した大人の世の偽らざる告白記」が、上田成年「人妻の姦通本能診断書」(『風俗科学2(10)』1954・10)では、「姦通本能を持つ女性達は、終戦後、各種条件の変化によつて尚更、姦通事件を多く引き起すチャンスを持った」ことなどが、それぞれ記されている。

- (27) 「妻が姦通したときの見破り方」(丸木砂土『りべらるる7(8)』1952・7)、「こういう女性が姦通する」(高橋鐵『りべらるる7(10)』1952・8)、「姦通夫人の実態追跡記」(市村濱子『デカメロン7(7)』1952・7)、「科学的姦通発見術」(『怪奇雑誌3(9)』1950・9)、「姦通発見 好色女房の姦通発見の秘法」(草田更齋『怪奇雑誌4(8)』1951・8)等々。
- (28) 平井和子「日本占領をジェンダー視点で問い直す―日米合作の性政策と女性の分断―」(『ジェンダー史学10(0)』2014)。
- (29) ジェイ・アブルトン著・菅野弘久訳『風景の経験―景観の美について―』(2005・12 法政大学出版社)。
- (30) 田中澄江「沈める瀧」の男と女」(『中央公論』1955・6)。
- (31) 三島由紀夫「欲望の充足について―幸福の心理学」(『新女苑』1955・2)。
- (32) 三島由紀夫「果してゐない約束」(『サンケイ新聞(夕刊)』1970・7・7)。三島は、「二十五年前に私が憎んだものは、多少形を変へはしたが、今もあひかはらずしぶとく生き永らへてゐる。生き永らへてゐるどころか、おどろくべき繁殖力で日本中に完全に浸透してしまつた。それは戦後民主主義とそこから生ずる偽善といふおそるべきパチルスである。こんな偽善と詐術は、アメリカの占領と共に終はるだらう、と考へてゐた私はずいぶん甘かつた」と述べている。
- (33) 斎藤理生「解説…三島由紀夫『恋文』の位置」(『新潮』2021・5)。
- (34) 南相旭『三島由紀夫における「アメリカ」』(2014・5 彩流社)。

※付記

本稿は、2022年度広島大学国語国文学会研究集会における発表を基に

作成したものである。席上、貴重なご意見を頂戴した皆様方に厚く御礼を申し上げます。

(くない ゆみこ、比治山大学准教授)